
遊戯王GX 転生者は我が道を行く

大禍時悪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 転生者は我が道を行く

【Nコード】

N8087Z

【作者名】

大禍時悪

【あらすじ】

普通の会社員であつた黄衣王真おついおうましかし通勤途中、神様のうつかりにより死んでしまう。

そんな事実を聞かされても飄々と死を受け入れる王真に神様は居た堪れなくなつたのか、お詫びとして第二の人生を歩ませようとするのだが、その人生の行き先は……遊戯王GXの世界であつた……。

製作者の大禍時悪です最初に私には文才が一切ございませんしタ

クテイクスも拙いにも程があるほど酷いですが、そんな事を許せる方はどうぞご贔屓に……オリカについてはアニメで出てきた物以外は使う予定はございません。

禁止制限等は9月現在の物を規定にさせていただきますが、改訂の度にデッキを弄って行きたいと思っています。

プロローグ

こんにちは、黄衣王真です。何故皆さんに挨拶しているのかと言うと、只今絶賛死亡中です

幽体離脱的な事になっています恐らく自分であろう血まみれで首が無く臓物が飛び出してミンチになっています。

凄惨な状況だねこれ、自分の体だと思いたくないねでもまあ諦めるしかいさ、だって自分の頭が向こうの方に転がってるんだもの、ああ……俺の原付が高かったのにフレーム粉々じゃん。や、もう乗れないから別にいいといえはいけど……。そんなことより凄いいね吸水コンクリート、俺の身体から流れ出る血液がどんどん吸収されるよもうすぐ失血するんじゃないかな？ や、もう死んでるから失血しても問題はないんだけどね。

「あゝモノローグの途中で申し訳ないのだが……ちょっといいかい？」

気付かなかったけどいつの間にか白髭で白髪のお爺さんがいらつしやいました。ああお爺さんと言っても俺のお祖父さんじゃないよ

「ああ、はいなんでしょう？ て言うか何故に俺の姿見えてんのか死んでるはずだよね俺」

「うん間違いなく死んでるよ、だってワシが間違っで殺しちゃったし」

「あれ？　じゃあもしかして俺を挽いた10トントラックの運ちゃんなの？」

「何でその方向に考えが行くのかとても疑問だし第一にひくの漢字を間違えてる気がするのだがのう……ところでワシが神様じゃ」と言ったらどう反応してくれる？」

神様？　がそういうと王真はジツと神様？　を見つめてからふむむと小さくうなずく。

「ああスミマセン神様って皆の想像した通りの長い白髭の老人なんだと、今しみじみと思ってたました死んでからこんな体験が出来るとはちよつとしたラッキーですね」

「死んだのにラッキーっていう君は変わってるねえ」

神様は若干引き気味でなおのほほんと王真に対して言った。

「ああ気にしませんよ変わってるってよく言われますし。それで神様が俺を殺したってどういうことで？」

「その事なんじゃがな、今日死んでしまう人間にチェックをつけていくんじゃけれどもね、ちよつとうとして間違えて君の名前にチェックうつちやったんじゃよ少なくとも後60年は生きるはずじゃったのだけれども……」

神様はちよつと気まずそうにこつちをチラチラ見ているが王真は気にせずに。

「ああ……まあ仕方ないですよ誰しも間違いはありますし気にしませんよ、てことは俺って地獄に行ったりするの？ お世辞にも天国に行けるような良いことなんて全くやってないんだけどさ」

「加害者のワシが言うのもなんなのじゃがまずは怒ったりはしないのかい？ それに目をつけるところが違いすぎないかの、普通なら残りの寿命の分のどうするんだとか、まだやり残した事があると憤りをぶつけてくるのこのう君は随分ドライなんじゃな」

「ドライ……と言うべきなのか単純に今現在こうして死んでいるので受け止めるしかないと言うかなんと言うか」

王真は若干戸惑いながらも答えるが表情は笑っている、正直薄々気付いてはいる自分が同じ年頃の人よりも冷めた事しか考えられないことくらいは。

「じゃあ聞いてみようかな？俺の寿命おおよそ60年どうします？まあ生き返れる訳では無いですよ、ほら元の体は首が飛んで臓物が挽き肉みたいにミンチになってるし」

「ああその事なんじゃがの生き返る……すなわち転生じゃな、この世界に転生するのはまず不可能じゃな。死んだ人間の情報を引き継いだ人間を作るとじゃないいくつかの矛盾が生じてしまうのじゃよ詳しくは秘密じゃがな、しかし……別の世界なら可能じゃな存在しないものを一から作るだけじゃからな」

なんか一から作るだけとかものすごいことを言ってるけど多分神様だからできるんだろう。

「別世界と言うとパラレルワールド的なものかなそれならそれ

で……」

「ふむ……それでもよいが辛いのはお前さんじゃぞ自分は知っていても相手は知らんからのう……ところで君はアニメやゲームは好きかの？」

「ええまあ人並みには好きですね」「いかんとは思ったのじゃが少し記憶を見せてもらったが遊戯王というアニメをよく見てるようじやな」

「まあ好きですねでも勝手に記憶みんなや神さんよ……遊戯王かいいですね世界としてはGXの世界がいいですけど決めるのは神様ですけどね」

「いやいや構わないよ出来る限りの我儘は聞いてあげるつもりじやよ」

「ああそれではとりあえず運動能力と頭脳はある程度もらえると嬉しいですね、今まで出たカードを各10枚ずつ現時点の俺のデッキとこれから出るカードを発売日に各10枚づつもらえると嬉しいですね。」

「ふむそれくらいなら全て叶えられそうじゃわい遊戯王GXの世界の一番最初入学試験の一週間前に目を覚まさせるようにしよう、その世界の前情報を脳の中につ込んでおくからの後は困った時は連絡できるようにしておこう正し無茶なお願いは禁止じゃよ……すぐに転生を始めるそれでは良い第二の人生を」

「ちよつとタンマ最後に一つ何から何までありがとうございましたまたいずれ声を聞くとします」

そして俺の黄衣王真は第二の人生を遊戯王GXの世界にて始めることになった。

デュエルアカデミア入学試験

おはようございます、黄衣王真です。今日覚めましたと言っても意識的な意味ですけどね、転生らしいと言えばそうですね生まれるところから始まりました。

しかし生まれたのは俺ではなく、俺の性格から趣向までまるまる模倣した俺らしい。ただし転生の事は一切知らないみたいだが……つまり自分の行動を別の人として見てる感覚だね。

そして時は経ち神様の宣言通りデュエルアカデミア入学試験一週間前に本体と意識が合体した様です、携帯を確認すると家族のアドレスとさりげなく神様の連絡先も登録されていた。すかさず神様にコールする。

「おはよう神様一生味わえないとてつもなく気持ち悪い体験をありがとうクソツタレ」

そして返事も待たずに通話を切るこの日に神様からの贈り物が届いていた。デッキを取り中を確認した後デュエルディスクを装着エクシーズモンスターとシンクロモンスターが反応するかを確認する、勿論揃える所から、見事成功しかも原作アニメと同じエフェクトまでついてスッゴい派手ゾクゾクしたね。ただあまり広くない自分の部屋でエクシーズ召喚したため家かなり揺れた。興奮してたからそんなことにも気付かなかったが家族が俺の部屋を扉の隙間から覗いていたのを。

「おはよう兄さん姉さん驚いた？ごめんねちょっとテンションが有頂天に……ね」

とりあえず兄姉を部屋の外に閉め出して着替えてから台所に立ち食事の用意、用意していると兄が一人と姉が三人いつの間にかテーブルについている。黄衣家の名前には皆王の漢字が付きます、末っ子の王真こと俺、長男の王我兄さん長女の王華姉さん次女の王姫姉さん三女の王世姉さんみんな仲の良い兄たちですが皆ブラコンですどうしてこうなったのだろうか。まあそれを差し引いても良い兄たちですが。

「王真くトースト二枚ねチーズのつけてね」

「王真さんご飯とお味噌汁を」

「王真ちゃんシリアルと牛乳はまだなの」

「王世姉さんオーブンの中にあるから王姫姉さん、よそつてあるから持って行って王華姉さんもね王我兄さ……」

「大丈夫だ王真私は自分で用意したしかな王真……朝からチャーハンはないんじゃないか」

「いいじゃないか昨日のが余ってて勿体ないんだから」

そう姉さん達の食事を用意しつつチャーハンを作っていた、なんで姉さん達は俺に頼りきりなんだろうかデュエルアカデミアへの入学が確定したら姉さんはどうするんだろうか。

「ところで王真、入試の方は大丈夫なのか？確か受験番号は1111番じゃなかったか？私たちの弟だからなんの問題も無いとは思うがな」

「兄さんその話は止めてくれ考えてる途中で寝ちゃったんだよ、それに買い被りすぎだよ何とかなるとは思ってるけどね」

そんな他愛もない話をしながら一週間は過ぎてゆく、と言っても兄さんや姉さんに試験用のデッキのテストをしてもらってただけどね。

そして試験当日。

「だあああざっけんなコンチクショウ」

そう叫びながらローラーブレードで自転車も絶句するほどのスピードで疾駆するそうしないと非常にまずいし怒りのやりどころも無い。

「ちくしょうなんで事故んだよ仕方ないけどさ！事故起こした奴犬に噛まれるホントに！」

電車の事故今思えばたしか主人公の十代も事故で遅れたはずだがそれを覚えていないのは自分の落ち度だ仕方がない。10分程走ると受け付けが見える、階段を飛び越え叫ぶ。

「「まったあああ」」

誰かと声が被るだが王真は知っているので気にしない。

「受験番号110遊城十代セーフだよね？」

「受験番号111黄衣王真まだ間に合いますよね！」

ほぼ同時に言い放ち十代がこちらを向く、それが俺と十代のファー

ストコンタクトだった。

「お前も遅れたのか俺は遊城十代よろしくな」

「ああ電車が遅れてな全速力でこっちに來たのさ俺は黄衣王真よろしくな十代とりあえずさっさと行こうこれ以上遅れるとまずい気がするからな」

.....

.....

.....

「おおやってるやってる」

「試験中だからな.....見たところ一桁台の連中だな」

見下げると珍しい白ラン姿の三沢がブラッドヴォルスに破壊輪を發動し勝利を収めた瞬間だった。

「あの一番見事なコンボだったな」

十代が独り言の様に呟く王真が反論しようとしたら十代の隣の水色が言った。

「そりゃそうさ受験番号一番つまり筆記試験第一位の三沢君だよ」

「むう.....あれだけでコンボと言うのか、ただトラップを使っただけじゃないか」

「複数のカードを組み合わせ使用するのがコンボじゃないか」

「そういう解釈にしておくよ十代」

「君たちも受験生？受験番号は？」

「ああ俺は１１０番こっちは１１１番だ」

「でも百番台のデュエルは一組目でとつくに終わってるよ」

「おいおいマジかよ水色受け付けでもセーフだったんだぜ理由も理由だ受けれるだろう」

『受験番号１１０番遊城十代君』

「よし俺の番だ」

意気揚々と階段を降りて行く十代そんな背中に何となくで声をかける。

「十代、頑張れよ」

「おう任せとけ」

「全く俺はおまえに何を任せたんだっつの」

「ねえ君さっきの人と知り合い？」

「いや今さっき出会ったばかりだぞ水色頭」

「さっきから水色水色って僕の名前は丸藤翔だよ」

「おつとすまない名前がわからんから身体的特徴がそれしかなかったんだ重ねてすまん翔」

「いやそんなには怒ってないからいいよそれより君はいいの？」

「いい？何がだ？デュエルなら十代の次にできるだろうさ恐らくはクロノス教諭のアンティークギアデッキだろうさ」

会場を見ると邪心トークンをリリースして古代の機械巨人をアドバンス召喚している所だった。

ふむ流石はソリッドヴィジョンだ古代の機械巨人のプレッシャーが半端じゃねえな泣く子が余計に泣きそうだな……お、フェザーマン殴り飛ばしたな。

「ヤバイな貫通のせいでライフが半分持ってたかな次教諭がモンスター引いたら終わるな」

「そんな掟破りモンスターじゃないか！」

「掟破りなあ……まああいうやつがこんなところで終わる訳がだろうさ」

そう王真が言っていると翔がこれでもかと言わんばかりに反論してくる。

「攻撃力3000に魔法、トラップも使えないそれに貫通持ちだよ無理に決まってる攻撃力3000を超えるモンスターなんてそう簡単に出せるもんか！勝てるわけないよ」

「……そう声を荒立てんな何も完全に使えないわけじゃないダメー
ジステップまでだ。モンスター効果までは防げない効果で潰せばいい
それにまだアイツは諦めた訳じゃないさ見てりゃわかる何とかする
さ」

ビルの上に立つフレイムウィングマンが炎を纏って古代の機械巨人
に突っ込み見事に勝利、崩れ落ちる巨人の残骸に潰される教諭。

「ホントに何とかしちゃった」

「だろ？だから言ったじゃないか何とかするってさ」

「ようお疲れさん良いドローを見せてもらったよ」

「王真見ててくれたか俺のデュエルをさ」

『受験番号111番黄衣王真君』

「ああしつかりとな……さて俺の出番だなそうそう面白い物を見せて
やるからしつかり見てろよ」

と言い王真会場に向かいながら後ろに手を振るディスクについてい
るデッキを取り確認するとある事に気がついた。

やべえデッキ間違えたエクシースデッキを使う予定だったのにある
うことか試作デッキ持って来ちゃった。前世ではある程度戦えるレ
ベルまではいけているがまだまだ勝率が心許ないだがライフ400
0だ8000じゃないいけるはずだ。

「二人目のドロップアウトボーイなのーネ今度こそ叩き潰して差し

上げるゝノデス」

「叩き潰せるならどうぞただし俺はなかなかやるぜ？」

「減らず口を叩けるのゝも今の内ですゝノ」

それを聞き王真はニヤリと笑いディスクにデッキをセットそして展開教諭はそのままデッキをシャッフルしているアンティークギアのままで来るらしい

「さあデュエルだ」

「私のターンドロニーヨ手札からテラ・フォーミングを発動その効果により、歯車街を手札に加えそのまま発動するのゝネ」

まずい歯車街が入ってやがるのか昔のカードだから完全になめてたそれにリアル的にも歯車街はアニメが終わってから出たはずだ。

テラ・フォーミング 通常魔法

自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える。

歯車街 フィールド魔法。

「アンティーク・ギア」と名のついたモンスターを召喚する場合に必要なリリースを1体少なくする事ができる。

このカードが破壊され墓地に送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から「アンティーク・ギア」と名のついたモンスターを1体特殊召喚する事ができる。

「更に古代の機械獣を攻撃表示で召喚なのゝネ」

古代の機械獣 効果モンスター

攻2000/守2000

このカードは特殊召喚出来ない。

このカードが戦闘によって破壊した相手効果モンスターの効果は無効化される。このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

「まだまだ終わらないの〜ネフィールド魔法セット。セットしたことで、歯車街を破壊され効果発動手札から古代の機械巨竜を特殊召喚するの〜ネ」

古代の機械巨竜 効果モンスター

攻3000/守2000

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。他の効果は使えないので割愛。

「セットされてい〜ル歯車街を発動してターンエンドです〜ノ」

クロノス ライフ4000

フィールド歯車街

モンスター2 機械獣、機械巨竜

魔法・罠、無し

「よし俺のターンドロ〜」

「俺はレッドガジェットを攻撃表示で召喚する」

レッドガジェット 効果モンスター。

星4 攻1300/守1500

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエローガジェット」を手札に加えることができる。

「更に融合を発動、手札のイエローガジェットとヴォルカニック・バレットを融合し重爆撃禽ボム・フェネクスを融合召喚」

「ボム・フェネクス？聞いたことのないモンスターなの？ネしかし攻撃力2800では我が古代の機械巨竜には叶わないの？ネ」

融合 通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「そうなんだ……まあすぐにわかりますよつと、さあ派手にいこうぜ重爆撃禽ボム・フェネクスの効果発動、1ターンに一度このカードの攻撃権を放棄してフィールド上のカード一枚につき300ポイントのダメージを与える。教諭の場にはモンスターが2体と歯車街、俺の場にはモンスターが2体よつて1500ポイントのダメージを与える！」

重爆撃禽 ボム・フェネクス 融合・効果モンスター

星8 攻2800/守2300

機械族モンスター+炎族モンスター

自分のメインフェイズ時、フィールド上に存在するカード1枚につき300ポイントダメージを相手ライフに与える事ができる。

この効果を発動するターンこのカードは攻撃する事ができない。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「マンマミィヤー!!」

クロノス ライフ4000 2500

「更に手札から融合回収を発動、墓地の融合とイエローガジェットを手札に加える」

融合回収 通常魔法

自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える。

「準備は整ったさあもういっちょ派手にいこうぜ。手札からもう一度融合を発動手札のイエローガジェットとフィードのボム・フェネクスを融合」

そうすると会場がざわざわし始める、『せつかく出した融合モンスターを!』『ここまで来てプレイングミスかよ』『何が出てくるんだワクワクするぜ』『どうということなんだ!』

「こういう事だ現れよ融合召喚全てを燃やせ起爆獣ヴァルカノン!」

「攻撃力2300……先ほどのモンスターの方が攻撃力は上そんなモンスターでどうするつもりなのネ?」

若干王真はイラッとした効果知らないのは仕方がないただ全ての価値を攻撃力で判断するのに苛立ちを覚えた。

「攻撃力ばかりが全てじゃねえさ効果も考慮して有用性を見つけ出すそれが楽しいんじゃないかねえかよヴァルカノンの効果発動、融合召喚に成功した時、こいつと相手モンスターを破壊その攻撃力分のダメージを与える！」

起爆獣ヴァルカノン 融合・効果モンスター

星6 攻2300 / 守1600

機械族モンスター+炎族モンスター

このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。
選択した相手モンスターとこのカードを破壊して墓地へ送る。その後、墓地へ送られた相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「さあ崩れる機械巨竜！ヴァルカノンと共にクライシス・ブラスト」

ヴァルカノンが機械巨竜に突撃して機械巨竜にしがみつくと機械巨竜が必死に振りほどこうとするがヴァルカノンは離れないそしてヴァルカノンが大爆発、機械巨竜が爆発と共に崩れ落ちクロノス教諭を押し潰す。

クロノス ライフ2500 - 500

「イエス！」

王真は拳をつきだし真上に掲げ叫ぶ。

「あり得ないの！ネドロップアウトボーイに二回も敗北するなんて

これはきつと何かの間違いなのゝか夢なのゝネ」

「あり得ないなんてことはないどんな事にも可能性があるその可能性を引き当てただけだ」

「すまんな十代面白い物を見せられなくてデッキを間違えたんだ」

ゆっくり歩いて十代と翔のもとに行く近くには座った白ラン姿の三沢もいた。

「いや随分面白いデュエルだったよ、融合モンスターを使い更なる融合モンスターを繰り出す戦術……」

「横から話しかけんな白ラン、まあ普段はあんな事はしないさ、あの状況ならあれが最善の策だったからな」

「いや、二番の言う通り面白いデュエルだったぜこの後俺とデュエルしようぜ王真！」

「さっき言っただろう？持ってくるデッキを間違えたんだって持ってくる予定のデッキならいくらでも相手をしてやりたいがな……それと十代二番つてのはどういうことだ？三沢の事だろ二番は、一番は……まあ自分の事だとは思うがな」

「わかる？」

「お前がそんな目をしてんだよくわかるよなあ翔」

「僕にふらないでよでもあの自信羨ましいな」

「ハッハッハ見るからに自信無さそうだからな自信なんぞ気にすんなさ俺だって試作デッキで自信なんか皆無のヒヤヒヤもんだったぞ」

「……あれで試作デッキ！（なの）」「……」

「あ？ああまだ火力が若干足りないし回りも悪い、中枢のカードが来なければそれこそ負け一直線だライフ4000なんぞ塵に等しいからな」

「ライフ4000が塵だって？一体どんなデュエルをしてきたんだ？」

三沢がかなり驚いた表情でこちらを見るそんなにおかしいか確かにこちらではライフ4000が普通だが……

「ふむ……普通にライフが一瞬で持つてかれる事なんてザラにあるそれとさっきの状態からフェネクスをもう一体追加してもそのターンで空にされるしなまあそんなデッキばかりじゃないが……その手のデッキがかなり多いそういうデッキの相手をさせていたしな。」

「まさかそんなデュエルばかりとは……あれで試作でも領ける」

「試作デッキだがもう少し弄らないと完成しないさこいつとやりたいたらまたいずれな……十代、アカデミアでなら本来のデッキを使つてやるじゃあなアカデミア会おう十代、翔」

「俺もいるぞ！」

そんな三沢のツツコミをスルーしつつ後ろに向かって手を振る……家に帰ると兄さん姉さんが気の早い合格パーティーの準備をしてい

る所を発見し手で顔を覆い溜め息をついた。

デュエルアカデミア入学試験（後書き）

どうもこんにちは、大禍時悪です初めてのデュエルシーンでしたがどうでしょうカードの説明は邪魔じゃ無いですかね次に少し別の形をとってみます。

次回予告

アカデミアについた俺達入試の時の約束の為にデュエルフィールドに行くと言った俺達に因縁をつけられる。

次回遊戯王GX転生者は我が道を行くアンティードュエル激突十代VS万丈目……あれ、俺が主人公だよな？お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8087z/>

遊戯王GX 転生者は我が道を行く

2011年12月29日21時49分発行